

## 面影は身に添い

辻 憲男（文学部教授）

山陽電車の須磨浦公園駅を降りると、強い潮の香りがする。海と山が近い。東側は一ノ谷の古戦場である。1184年の2月、平家の敗将の悲報が京に届いた。その中に資盛(すけもり)の名はなかった。先に西海へ落ちのびたのだ。

しかし翌年3月、壇ノ浦で平家は滅亡した。恋人・資盛も24歳で海に沈んだ。「みなかねて思ひしことなれど、ただほれぼれ(茫然)と」、流す涙も人目がはばかられ、ずっと引きこもり寝て、思いきり泣き暮らした。忘れようとするけれど、面影は身に添い、言葉の一つ一つを聞く心地がして、悲しみにさいなまれた。寿命というならまだしも、いくさで帰らぬ命は何に例えられよう。…四つ五つ年下の、美男の貴公子だった。うわついた恋はすまいと心に誓っていたのに、建礼門院徳子に仕えるうち、不意に恋におちた。秘密の仲だった。資盛には妻がいた。運命を予感してか、さすがに彼も足しげく訪れた。じつは彼女にはもう一人、忘れられない中年の恋人がいた。心のすきにつけ入って去った色好み、肖像画の名手として知られる藤原隆信であった(「建礼門院右京大夫集」)。

右京大夫(うきょうのだいぶ)は能書家の父、箏の名手の母と、高い文化教養にめぐまれた才女。顔見知りの小宰相(こざいしょう)は、あわれ、一ノ谷で討たれた夫・通盛のあとを追った。わたしは生きよう。資盛はいつか、生きて後世を弔えと言ったことがあった。歌集360余首は、恋人追慕の念に貫かれている。



宮中一の「額髪美人」小宰相は初め通盛の熟愛を拒んだという。  
写真は須磨海岸一ノ谷から鉢伏山。